

【平成26年度研究会発表記録】

人吉・球磨のおもしろ考古学

木崎康弘*

熊本県立装飾古墳館

*e-mail: kizaki-y-dh@pref.kumamoto.lg.jp

キーワード：人吉・球磨，考古学，旧石器，高沢洞穴遺跡，谷間，縄文時代，免田式土器，青銅器，装飾古墳 磐井の乱

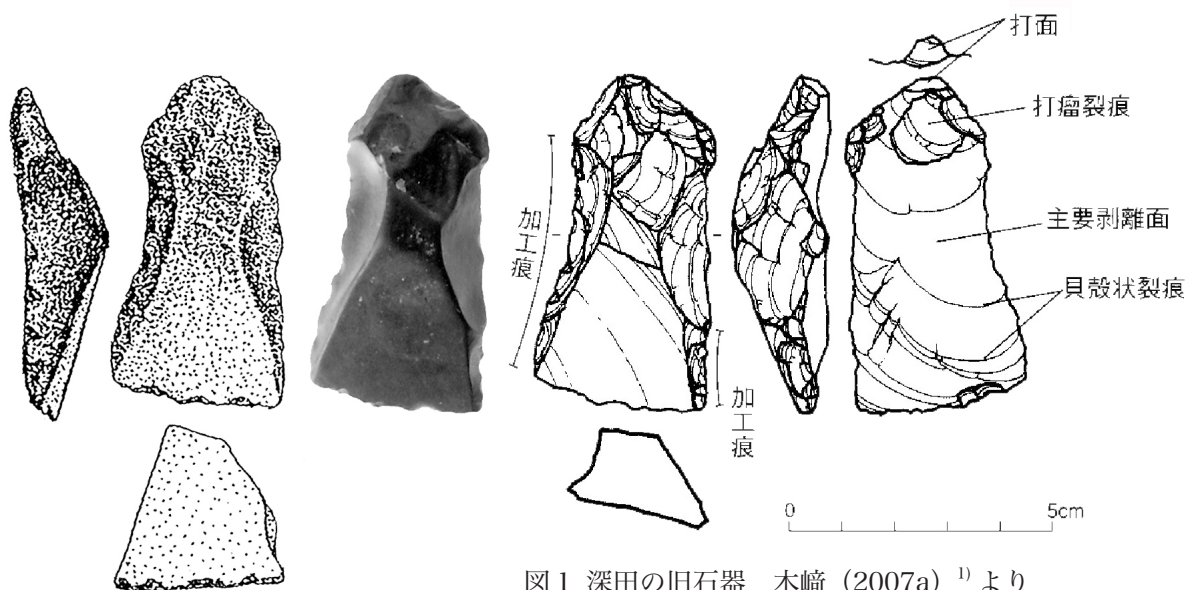


図1 深田の旧石器。木崎 (2007a) ¹⁾ より

1 深田にあった日本最古の石器?????

石器捏造を白日の下に晒した上高森スキャンダルから、今年で14年。未だにその傷は癒えず、最古の石器の探究には及び腰。だからといって、何もしないというのも味気ない。

舞台は、1973年7月初め頃の深田小学校の給食室建築工事現場。そこに、露になった厚さ約1.6mの砂礫層の石を穿って遊ぶ小学生数人がいた。その中の一人の児童が、他の石とは色も形も違う真っ黒で異様な岩片(図1)を手にした。その後、石器は、原田正史氏のもとに(図2)。それが物語の始まりだった。

原田氏によれば、石器が見つかった砂礫層は、



図2 出土部を指し示す原田正史 (熊本日日新聞 1973年7月12日付け記事)

阿蘇溶結凝灰岩（8万年前）よりも古く，加久藤溶結凝灰岩（33万年前）よりも新しい年代だという。20～10数万年前の可能性があり，15万年前に陸橋を渡ってきた旧人たちが持っていた石器かもしれない。もしかしたら，日本最古の石器の一つとして，将来日本の歴史の一頁を飾る石器になるかも。それを証明するにも，新たな遺跡の探索しか術はなく，今後，人吉・球磨の考古学が果たす役割は，相当に高いのである。

②海と山を行き交う人びと

1934年9月26日，神瀬村（現，球磨村神瀬）高沢の高沢尋常高等小学校運動場工事で鍾乳洞が発見され，縄文式土器，磨製石斧，アワビ・ハマグリなどの貝殻，シカ・イノシシなどの獣骨が出土した（図3）。10月16日付の『西部毎日新聞』紙上の記事（富田紘一氏私信）でそのことを知った，菊池郡日吉村（現菊池市泗水町）の坂本經堯氏は，10月21日に高沢の鍾乳洞を訪れ，洞穴遺跡と出土遺物を調査した。

九州山地から見つかった海の貝殻。それらは，1万年前の早期縄文人たちが一時の住み処（すみか）に持ち込んだものだった。海と山を行き交う縄文人の姿がそこに記されていたのである。そして，川辺川ダムの建設事業が本格化した1990年代以降，代替地や水没地では，埋蔵文化財の発掘が活発化していった。五木村や相良村では，専門の学芸員を採用して体制を強化し，県文化課との協力体制で，次々と発掘を進めた。その結果，野々脇遺跡，頭地田口A遺跡，小浜遺跡，逆瀬川遺跡，頭地下手遺跡，久領上園遺跡，相良村野原遺跡などが次々と発掘され，川辺川沿いのV字谷の谷底やその斜面中の河岸段丘で，かつてそこに暮らしていた縄文人たちの遺構や遺物が次々と掘り出されていった²⁾。その中には，南九州や中九州，さらには瀬戸内からもたらされた土器や石器の材料



図3 高沢洞穴遺跡と出土遺物（筆者撮影）

があった。それらは，海と山を行き交う縄文人の姿を彷彿させてくれるものだった。

③北と南の狭間で活きた人びと

「皆さん，免田式という名前が使うてください」

1984年（昭59年）11月11日，人吉市のカルチャーパレス研修ホール（肥後考古学会・鹿児島県考古学会連合学会）に，高田素次氏の声が響いた。「様式名としては成り立たない」「重弧文長頸壺だ」高田氏には，自分が学界・学会デビューを果たし，50年近く付き合ってきた土器であり，そんな発言にいたたまれなかった。

免田式土器は，弥生時代後期後半の土器である。壺形や甕形，高坏形などの土器があり，筆者は，それらを含めた様式として，球磨川上流域の土器様式であると認識している³⁾。

その中でも特に有名なのが長頸壺（図4）である。形はソロバン玉のような胴部，スッと長く伸びた頸部で，一種独特である。胴部の上半分は，沈線で引



図4 重弧文（免田式）土器（あさぎり町役場ホームページより）

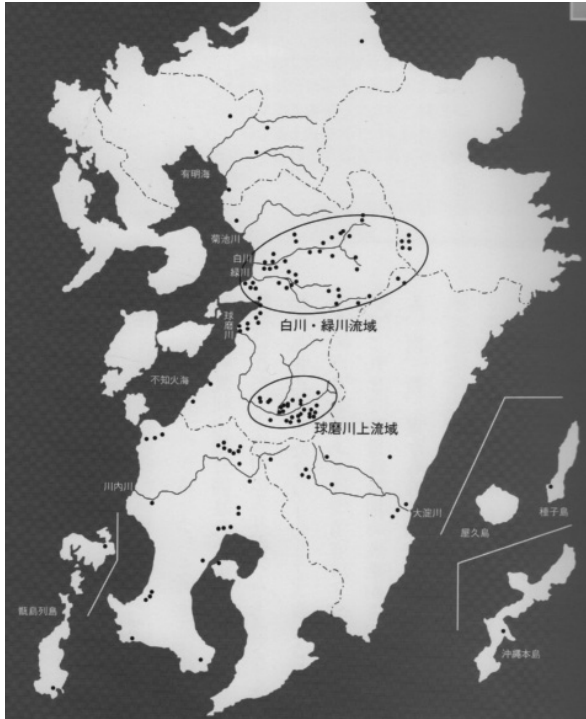


図5 重弧文土器の九州・南西諸島内分布
吉永 (1984)⁴⁾より

かれた重弧文や平行文で飾られ、華やかである。ところで、この長頸壺の分布(図5)がまた興味深い。九州山地を介して、白川・緑川流域と球磨川上流域に特に集中しているのである。白川・緑川流域の弥生人たちと球磨川上流域の弥生人たちとの強い繋がりが、この土器の分布を見て理解できそうだ。

実はその物証の一つが、人吉・球磨で出土した数少ない青銅器ではなかろうか。人吉・球磨では、錦町夏女遺跡で2点の銅鏡(内行花文鏡-倣製鏡)と1点の銅釧、あさぎり町本目遺跡で1点の方格規矩鏡(舶載鏡)の破鏡がある(図6)。他に、年代は遡るかもしれないが、多良木町ヤリカケマツ遺跡で細形銅剣が見つかった(図6)。いずれも、南九州には少ないもので、これらは、中九州以北の地からもたらされたものに違いない。その青銅器の道の鍵を握りそうなのが夏女遺跡だと考える。

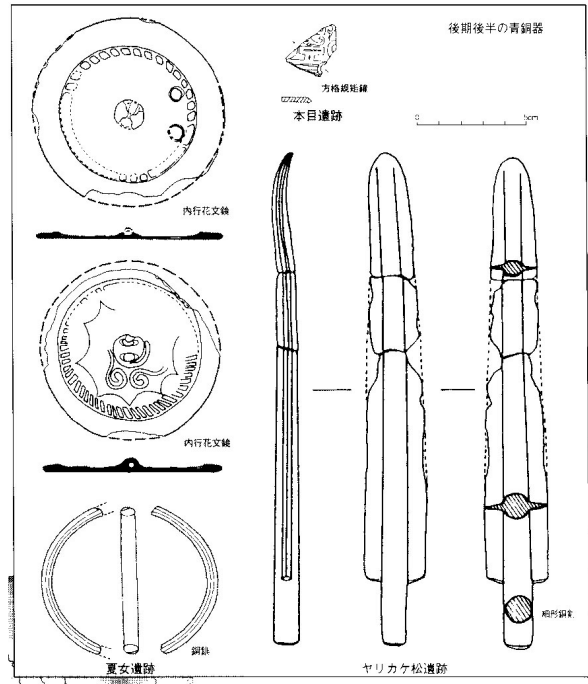


図6 球磨出土の青銅器
木崎 (2007d)⁵⁾より

免田式土器の長頸壺の出土遺跡を押さえると、3点の青銅器が見つかった夏女遺跡が扇の要の位置にありそうだ(図7)。しかもそこは、五木谷からの、また五木谷への出入り口に当たってもいそうだ(図7)。つまり、夏女遺跡の人びとが、白川・緑川流域の弥生人たちと交流において重要な役回りを演じていたとも想像できそうなのだ。

ところで、人吉・球磨は、古くから伝説上の「熊襲-クマソ」の地の一つとみなされてきた。それは南九州を本拠においた人びとであった。また近年では、森浩一氏が免田式土器の長頸壺は熊襲によって生み出されたものとの考えを示した。また佐原真氏も同様だ。

南九州の一角にあった人吉・球磨。そしてまた中九州の一角であった人吉・球磨。そこで繰り広げられたであろう、北と南の狭間で活きた弥生人たちのドラマには、どんなことがあったのだろうか。

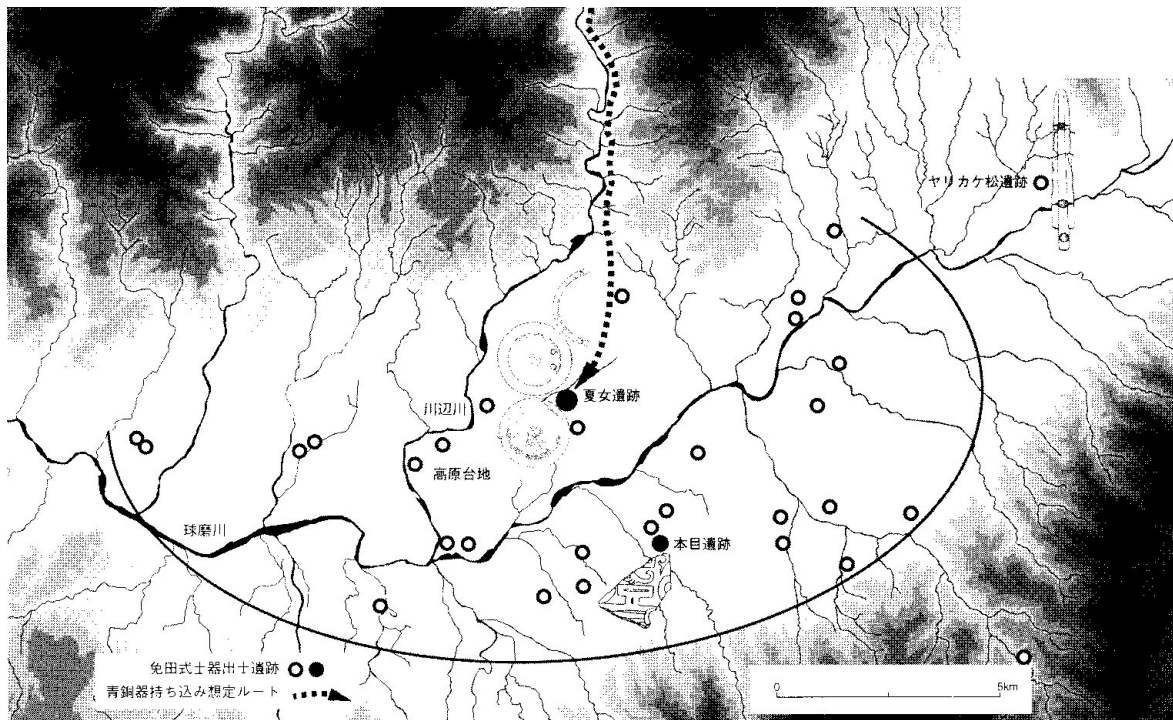


図7 重弧文土器遺跡の分布と球磨への青銅器搬入想定ルート. 木崎 (2007d) ⁵⁾ より



図8 京ガ峰横穴群の装飾 (轆) (筆者撮影)



図9 京ガ峰横穴群の装飾 (楯・剣・刀) (筆者撮影)

④肥後、北と南の装飾古墳

人吉・球磨には、装飾古墳がある。人吉市大村横穴群、錦町京ガ峰横穴群、相良村小原横穴群などである。その特徴は、阿蘇溶結凝灰岩に穿たれた横穴墓の傍の岩壁に浮き彫りされた絵柄である。その絵柄には、矢携帯用の筒である鞆(図8)、盾・刀・剣(図9)、馬、円文、三角文などがあつた。

ところで、大村横穴群や京ガ峰横穴群のような絵

柄を浮き彫りする横穴が、菊池川流域にもある(図10)。代表例としては、山鹿市鍋田横穴群、長岩横穴群など、その例の多さからもそちらが本拠地である。

この菊池川流域の装飾横穴群と人吉・球磨の装飾横穴との絵柄の共通性は、その間にある空白地域の存在とともに、興味深い事実である。

この事実に対して、筆者は、『相良村誌』(1996年)⁶⁾の中で、次のように述べたことがあつた。「装

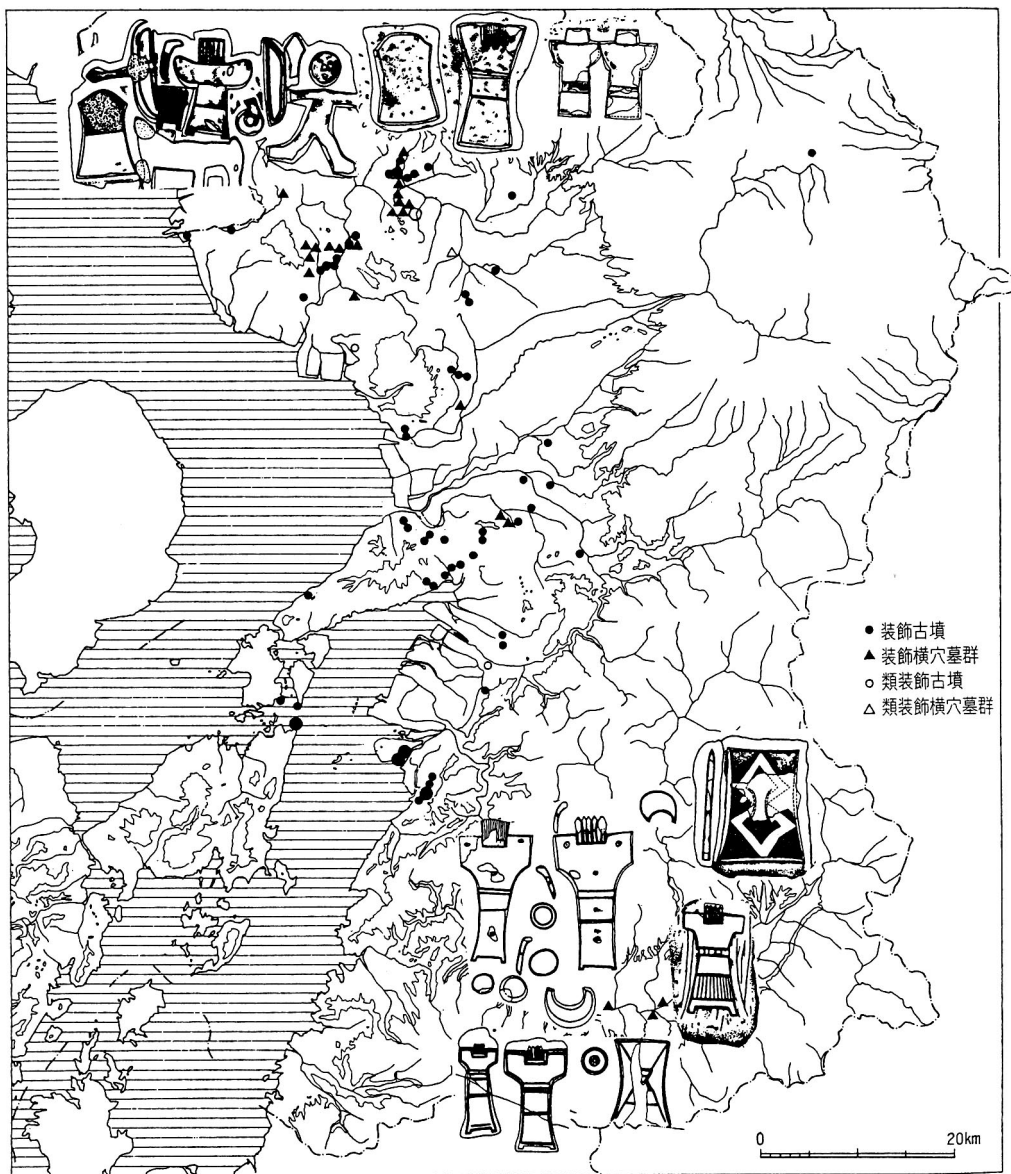


図10 球磨と菊池川流域の、よく似た装飾絵柄. 木崎康弘(1996)⁷⁾より

飾ある横穴墓が流行した頃、それは6世紀後半から7世紀にかけての古墳時代後期でした。おそらく、その頃、山鹿周辺から、五木の峠や山道を通り、人吉盆地の西側に移り住んだ人びとがいたのでしょう。それは、6世紀の中頃の「磐井の乱」後に、移り住んだ人びとでした。逃れてきた人びとか、新天地を求めてきた人びとか、または他の理由が隠されているのでしょうか。謎は深まるばかりです」と。

また、前田一洋(2007)⁸⁾は、次のように述べている。「ところで、これらの黄泉に眠る豪族は、いったい何者か。この地が「大村」であることから、古代豪族の「多氏」であるとも考えられる」と。「火君」「阿蘇君」を子孫とし、肥後を本貫とする多氏と大村横穴群や京ガ峰横穴群との関係もまた、興味深い見解である。

さてさて、肥後、北と南の装飾古墳は何を語るのだろうか。

参考文献

- 1) 木崎康弘 2007a. 発見された石片が語ること。図説 人吉・球磨の歴史, 郷土出版社。
- 2) 木崎康弘 2007b. 谷間に暮らした縄文人たち。図説 人吉・球磨の歴史, 郷土出版社。
- 3) 木崎康弘 2007c. 広域な地域間交流を物語る免田式土器。図説 人吉・球磨の歴史, 郷土出版社。
- 4) 吉永 明 1984. 免田式土器研究史。肥後考古学会・鹿児島県考古学会 連合学会資料。
- 5) 木崎康弘 2007d. 銅鏡や銅釦が語ること。図説 人吉・球磨の歴史, 郷土出版社。
- 6) 相良村 1996. 相良村誌。
- 7) 木崎康弘 1996. 第1章 原始・古代。相良村誌人文編。
- 8) 前田一洋 2007. 黄泉の国を飾る彫刻群。図説 人吉・球磨の歴史, 郷土出版社。